

東洋建築史圖集



日本建築學會編 彰國社刊

まえがき

日本建築学会は、すでに日本建築史図集、西洋建築史図集、近代建築史図集を刊行しているが、ここに東洋建築史図集が加わるようになった。

近年、わが国でも東洋建築史の学習・研究を志すものが増加し、そのための基本的な教材あるいは研究資料としての図集の刊行が強く望まれてきており、本書はそれにこたえようとするものである。

東洋はきわめて広範囲にわたっており、したがって本書の作成には、多くの研究者からなる小委員会をつくってその任にあたった。ここでは東洋を、西アジア・北アフリカ、南アジア、中央アジア、東アジア、東南アジアの5つの地域に大別し、委員の間でそれぞれ分担して、建物の選択、図版の収集・配列、解説などを担当した。なお、全体的な体裁は、すでに建築学会から刊行されている他の建築史図集の形式を踏襲している。

本書は、東洋建築史に関する最初の図集であり、またさまざまな制約もあって、なお多くの問題点を残している。一方、最近の東洋における活発な調査研究活動は、着々と新しい知見を加えつつあり、さらに保存のための修理・復原なども進められている。今後、それらの成果をとり入れつつ、さらに充実した図集を目指して改訂を重ねていくべきものとする。

図版解説の担当者は次頁に示す通りであるが、そのほか、彰国社の編集担当者等、多くの方々の助力を得た。ここに謝意を表するものである。

1995年6月

日本建築学会 建築歴史・意匠委員会

建築歷史・意匠委員會 (1995年6月現在)

委員長 幹事 委員	西谷伊狩清藤	和直重勝真恵	夫樹剛重一介	吉伊草竺藤	田藤野覺森	市三雄夫曉信	大川三雄	川直充忠	雄樹義直	大場小寺丹山	場武羽岸	修久博常	片越西	桐野垣	正安	夫武比古
-----------------	--------	--------	--------	-------	-------	--------	------	------	------	--------	------	------	-----	-----	----	------

東洋建築史図集執筆者

西アジア・北アフリカ (1~23)

岡田保良	1-1・3・4, 2, 3
関 和明	1-2・5~8
石井 昭	4~23

南アジア (24~45)

岡田保良	24, 25, 27~29
波多野純	26, 38, 39
渡辺勝彦	30~35
千原大五郎	36, 37
石井 昭	40~45

中央アジア (46~55)

小寺武久 46~55

東アジア (56~83)

浅川滋男	56, 57-1・4・10, 58-1, 59-4・5・9・10, 60-3, 61-1~4・6・7・9, 62-7, 72-3~5・8, 73, 74, 75, 76
田中 淡	57-2・3・5~9, 58-2~11, 59-1~3・7・8・11~13, 60-8・10・13, 61-5・8, 62-1~6, 68-3・5, 70-4~7, 71-3~6, 72-1
稲葉和也	59-6
村松 伸	60-1・2・4~7・9・11・12, 62-8, 63~67, 68-1・2・4・6~9, 69, 70-1~3, 71-1・2・7, 72-2・6
堀内仁之	72-7
中西 章	77, 79, 80, 82
片桐正夫	76, 78, 81, 83

東南アジア (84~104)

太田邦夫	84~88, 89-9・10
浅川滋男	89-1~8
千原大五郎	90~101
布野修司	102~104

協力者

佐藤浩司, 谷水 潤, 山田幸正

目次

西アジア・北アフリカ

1	古代末期のシリア	
2	バルティア時代の建築	
3	ササン朝ペルシアの建築	
4	中東アラブ圏の初期イスラーム	1
5	中東アラブ圏の初期イスラーム	2
6	中東アラブ圏の初期イスラーム	3
7	中東アラブ圏の中世	1
8	中東アラブ圏の中世	2
9	中東アラブ圏の近世	
10	マグリブ圏の初期イスラーム	
11	マグリブ圏の中世	1
12	マグリブ圏の中世	2 (フェズ)
13	マグリブ圏の近世	
14	トルコ圏の中世	1
15	トルコ圏の中世	2
16	トルコ圏の近世	1
17	トルコ圏の近世	2
18	トルコ圏の近世	3
19	イラン圏の初期イスラーム・中世	
20	イラン圏の中世	1
21	イラン圏の中世	2
22	イラン圏の近世	1
23	イラン圏の近世	2

南アジア

24 都市文明の勃興
25 古代都市の諸施設
26 インドの仏教遺跡
27 パキスタンの仏教遺跡
28 石窟寺院 1 (仏教)
29 石窟寺院 2 (ジャイナ教・ヒンドゥー教)
30 初期ヒンドゥー寺院
31 初期型・中間型・ヒンドゥー寺院
32 インドアーリア型ヒンドゥー寺院
33 インドアーリア型ヒンドゥー・ジャイナ寺院
34 ドラヴィタ型ヒンドゥー寺院
35 ヒンドゥー宮殿
36 スリランカ 1
37 スリランカ 2
38 ネパールの仏教・ヒンドゥー建築
39 ネパールの仏教僧院と王宮
40 テリー諸王朝のイスラーム建築
41 地方諸王朝のイスラーム建築 1
42 地方諸王朝のイスラーム建築 2

43	地王諸王朝のイスラーム建築	3
44	ムガル朝の建築	1
45	ムガル朝の建築	2

中央アジア

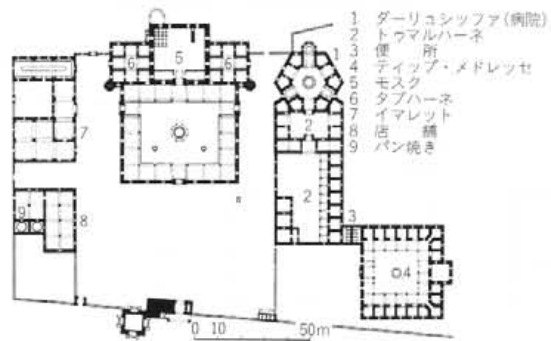
46	先史・古代イラン期	
47	グレコ・バクトリア、パルティア朝	1
48	グレコ・バクトリア、パルティア朝	2
49	クシアン朝	
50	ササン・エクトル・チュルク朝	1
51	ササン・エクトル・チュルク朝	2
52	イスラーム期中世	
53	イスラーム期近世	1
54	イスラーム期近世	2
55	イスラーム期近世	3

東アジア

56 先史時代の住居址
57 殷・周時代の遺跡
58 春秋・戦国時代の遺跡と出土遺物
59 秦・漢時代の建築と遺構
60 南北朝時代の石窟と仏教建築
61 隋・唐時代の都城と宮殿・陵墓
62 隋・唐時代の仏教建築
63 宋・元時代の都市
64 宋・遼・金・元時代の仏教建築 1
65 宋・遼・金・元時代の仏教建築 2
66 五代・遼・宋・金時代の仏塔
67 宗・元時代の道教・イスラム建築
68 五代・宋・金・元時代の陵墓・住宅・家具・技術
69 明・清時代の都市と宮殿
70 明・清時代の陵墓と壇
71 明・清時代の庭園
72 明・清時代の仏教建築・孔廟・技術
73 明・清時代のラマ教・イスラム教建築
74 中国諸民族の伝統的住宅 1 (漢族)
75 中国諸民族の伝統的住宅 2 (少数民族)
76 先史・漢四郡・高句麗の建築
77 百濟・古新羅
78 新羅の建築
79 高麗の建築
80 高麗末・李朝初の木造建築
81 李朝時代の都城と宮殿
82 李朝の寺院と郷校・書院
83 李朝の住宅・樓閣・兵館



1



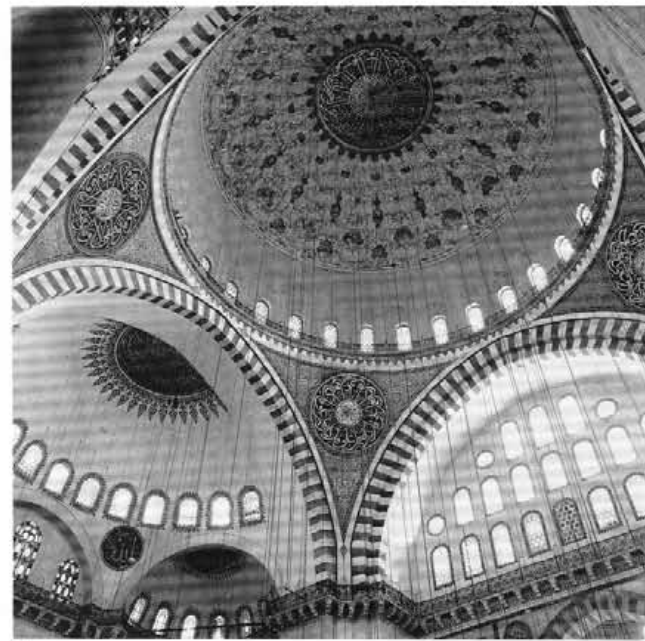
3



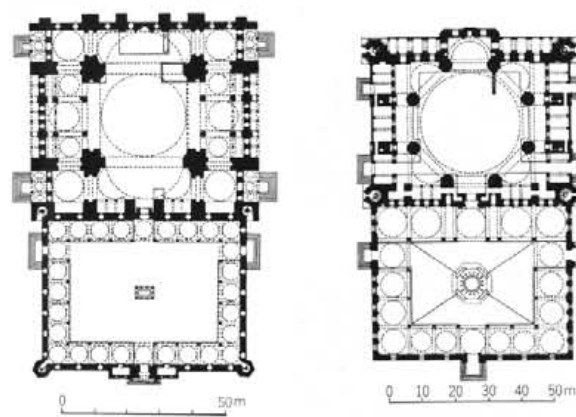
4



7



2



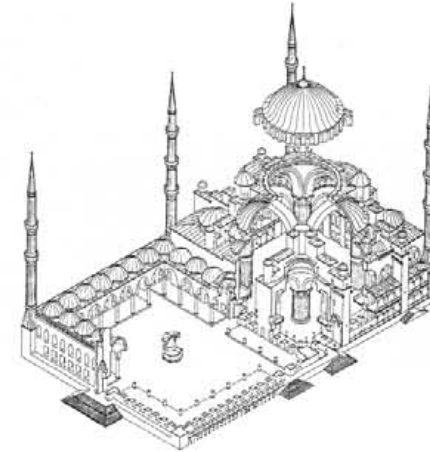
5

6

- 1.3 バヤズィッド2世のキュリエ(エディルネ, 1484~88)
2,4,5 スュレイマニエ・キュリエ(イスタンブール, 1551~57)
6,7,8 セリミエ・ジャーミ(エディルネ, 1569~74)



8



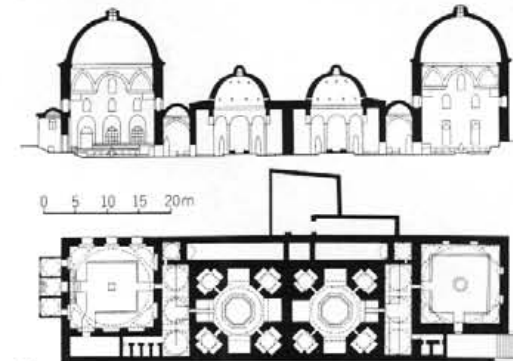
1



3



6



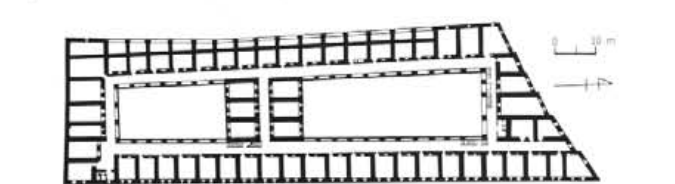
8



2



4



5

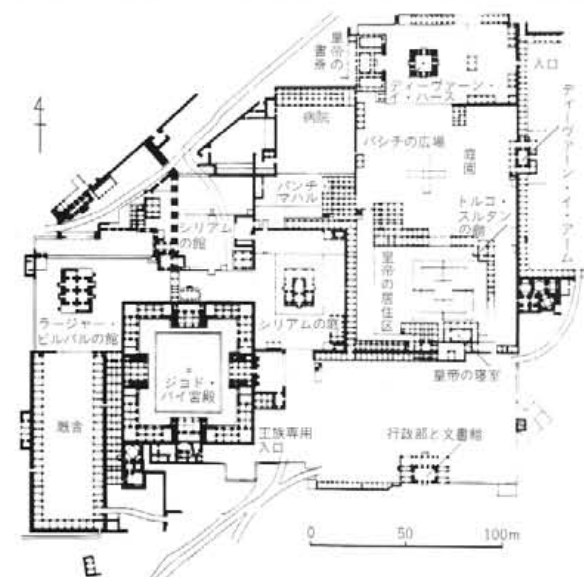


7

- 1.2 スルタン・アフメット・ジャーミ(イスタンブール, 1609~17)
3 ヌール・オスマニエ・ジャーミ(イスタンブール, 1748~55)
4 ルメリ・ヒサル(イスタンブール, 1452)
5.7 ビュック・イエニ・ハーン(イスタンブール, 1764)
6 アフメット3世の泉亭(イスタンブール, 1728)
8 ハセキ・ビュッレンのハмам(イスタンブール, 1556)



1



3

- 1,4 フマイユーン廟(デリー, 1560~61)
 2 ジャーミ・マスジッド(ファテプルシクリ, 1571)
 3,6,8 ファテプルシクリ(同, 1569~81)
 5 アクバル廟(シカンダラ, 1605~15)
 7 ジャハングール廟(ラホール, 1627)



5



7



2



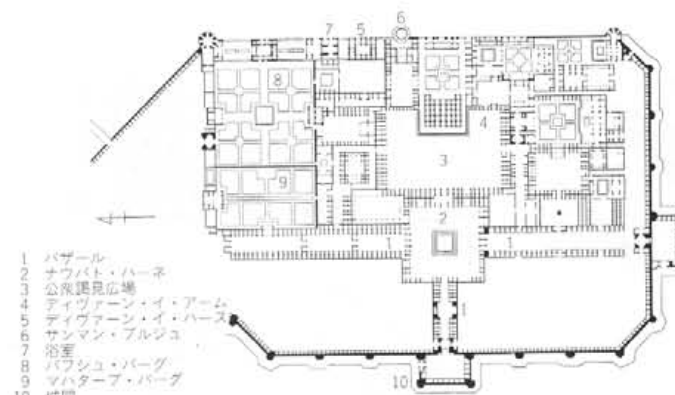
4



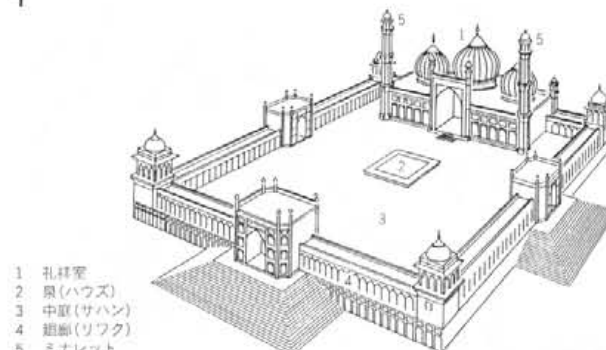
6



8

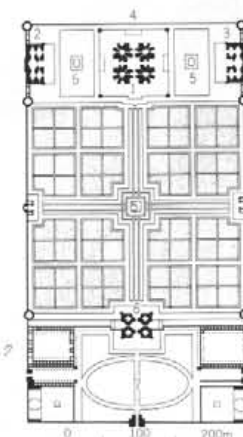


1

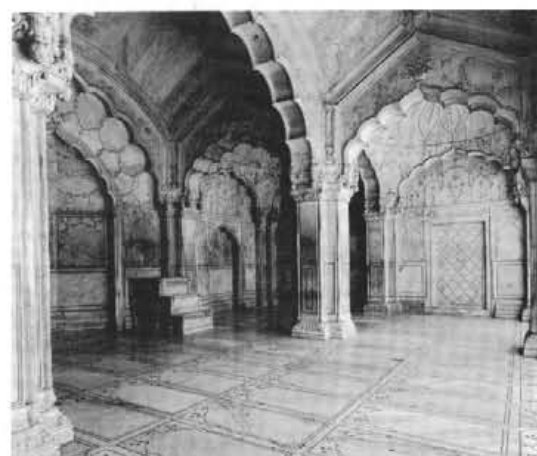


3

- 1,2 レッド・フォート(デリー, 1638)
 3 ジャーミ・マスジッド(デリー, 1648~55)
 4,5,6 タージ・マハル(アグラ, 1632~54)
 7 モティ・マスジッド(デリー, 1662)
 8 サフダル・ジャン廟(デリー, 1753)



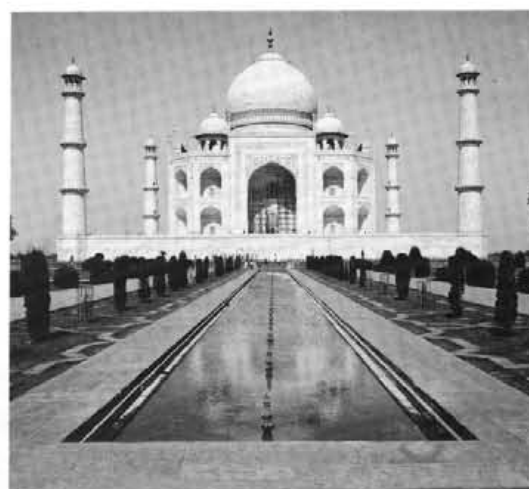
5



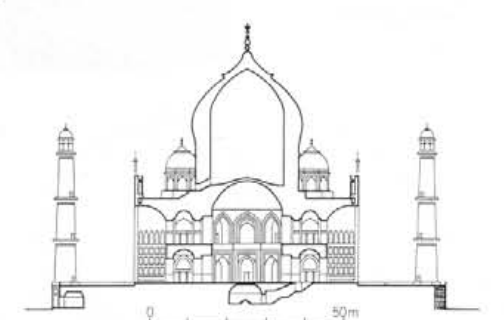
7



2



4



6



8

1397年頃カラマン朝アラッディーン・アリー・ベクによって、青の彩釉タイルで覆われた半円形の縦溝のドラム部と円錐形屋根が付加され、総高は25mとなった。

廟以外の建物はいずれもオスマン朝時代のものである。泉盤のある中庭をし字形に囲んで、18室の宿房が設けられもう一方の面にはモスクの回廊が付き、その奥に大ドームを冠する二つの広間が続く。手前はモスクの礼拝室で、他はこの教団独特の儀礼である旋踊を行う空間である。

15-8
ドェネル・キュンベット（**カイセリ**，**ルーム・セルジュク朝**，**1276**頃）Döner Kumbet（Kayseri）
キュンベットと呼ばれる塔状墓廟は、中世トルコで盛んに建設された。このキュンベットは、王妃シャー・ジハーン・ハトゥーンのために1276年頃建てられた。

全体の外観は、下部が正方形で上部が正十二角形を呈するプリズム状の基壇、リブ状のブライド・アーケードを付す正十二角形の塔身、その上の円筒部、そして円錐屋根から成り立つ。

この建築で最も注目されるのは、壁面に施された各種の装飾である。塔身の下端部、コーニス、出入口や窓の上部には、精細なスタラクタイト（鍾乳石状装飾）が見られ、またアーケード内の平たい壁面には幾何学文様や植物文様の浮彫りが施され、しかも随所に高浮彫りが加わっている。これらの高浮彫りに用いられているモティーフは、やしの木、獅子、竜、双頭の鷲など、中世トルコに固有な具象性の強いものである。

15-9,10
イエシル・ジャーミ（**ブルサ**，**オスマン朝**，**1424**）
Yesil Cami（Bursa）
コンスタンチノーブル征服までのオスマン朝の首都であったブルサに、スルタン・メフメット 1 世の命によって着工され、10年後の1424年に完成した。

基本的プランは、初期オスマン朝建築において一つの特徴的タイプであった逆T字形である。すなわち、泉水を備えた中央広間、床レベルを一段上げ、キブラ方向に延びた礼拝室、そして広間の左右に開く二つの小室、それら 4 室が逆 T 字に配置されている。中央広間手前は 2 層のギャラリーで、上層中央部はスルタンのためのものであった。広間左右の小室はデルヴィシュ（イスラーム神秘主義遊行僧）のためのタブハーネ（集会所兼宿泊所）として用いられた。もともと正面ファサードには、五つペイからなる柱廊が付加されていたが、後世失われた。

「緑のモスク」の名が示すとおり、内部は青や緑などの彩釉タイルで装飾されており、すでにオスマン朝セラミックの高い水準を示している。

16-1,3
バヤズィッド 2 世のキュリイェ（**エディルネ**，**1484～88**）
Bayazid II Kulliye（Edirne）
キュリイェと呼ばれる数種の公共施設の複合体は、中世の時代すでにその萌芽的なものは建てられているが〔→14-3，4〕、複合される施設の質や数において飛躍的に発展、整備されるのはオスマン朝時代になってからである。スルタン・バヤズィッド 2 世の命により、エディルネに1484～1488年に建設されたキュリイェは、本格的なものとして比較的早い時期に属する例である。主任建築家はハイレッティン・アガであったとされる。

ジャーミ（大モスク）を中心に、東にイマレット（食堂）、西にダーリュッシファ（病院）、トゥマルハーネ（精神病院）、トゥッ・メドレッセ（医学校）などの施設が、外壁に開かれた広いズィヤード（外庭）の

中に並んでいる。モスクの礼拝室は 1 辺約24mの正方形広間を一つのドームで覆った単純明快なもので、その左右には対称にタブハーネと呼ばれる神秘主義教団に属する遊行僧（デルヴィシュ）たちの集会兼宿泊所があり、それらの前面に、回廊で囲われ泉水を伴う前庭が付く。

設計手法として注目される点は、ダーリュッシファの正六角形のプランを除き、すべての建築が方形プランにドームを架したユニットによって構成されていることである。このような建築要素の単純化とそれらを総合して建築を構成する合理性は、盛期オスマン朝建築の一つの重要な性格といえる。

16-2,4,5
スュレイマニイェ・キュリイェ（**イスタンブール**，**1551～57**）
Süleymaniye Külliye（Istanbul）
オスマン帝国がその勢力の絶頂期にあったスュレイマン大帝の治下、1551年から57年にかけて大帝自らの名において建造した大モスクで、主任建築家はシニアンであった。

モスクはひときわ高い丘の上に威風堂々と立ち、周囲に五つのメドレッセ、ダーリュッシファ、トゥマルハーネ、イマーレット、ハンマーム（浴場）など大小20余りの施設を伴う巨大なキュリイェの中心を占めている。また、モスクの南に接する一画は、スュレイマン大帝とその一族のための墓所になっている。

プランは、ほぼ正方形の礼拝室とやや横長の前庭とからなり、周囲に約40mほどのズィヤードを備えている。礼拝室の架構は、中央部に 4 基のピアを立て、その上に大ドームを冠し、前後二方に半ドームを添える方式をとる。半ドームの基部は、 3 連のアーチと 2 組の半小ドームが組み合わされ、大ドームの左右の側廊部は 3 個の小ドームが配される。大ドームの内径は約26m、頂点までの高さは約52mにも及び、その規模はすべての前例を凌駕する。

16-6,7,8
セリミイェ・ジャーミ（**エディルネ**，**1569～74**）
Selimiye Cami（Edirne）
セリム 2 世の発願によって、1569年から74年にかけてエディルネに建設された大モスクで、建築家シニアン自ら秀作と呼んだ80歳のときの作である。

前庭と礼拝室とから成り立つ基本的なプランは、多くの先例と変わらないが、礼拝室の架構法に独特の創意が見られる。すなわち、礼拝室は横長の長方形とし、内接する正八角形の頂点の位置に 8 基の巨大なピアを立て、これらを結ぶアーチの上に、大ドームを据え、大ドームの四隅にそれぞれ半ドームを添えている。これにより、広々とした集的な空間をつくり出すことに成功している。また、礼拝室の奥壁中央部、ちょうどミヒラーブを含む部分が深いアブス状に外へ突出していることも特徴的である。

外観において、礼拝室の四隅に同形同大のミナレットを配し、集中的なドームの効果を強調している。

17-1,2
スルタン・アフメット・ジャーミ（**イスタンブール**，**1609～71**）
Ahmediye Cami（Istanbul）
スルタン・アフメット 1 世の命によって、シニ안의弟子にあたる建築家メフメット・アガが1609年から17年にかけて、首都イスタンブールに建築した壮大なモスク。

プランは正方形の礼拝室に長方形の前庭を加えた一般的なもので、礼拝室の架構は、 4 基のピアで支えた大ドームの前後左右に半ドームを添える方式を取っている。左右および後方の半ドームにおいて、その基部に各々 3 個ずつの小さい半ドームを付す新たな工夫がこらされている。内部は、青を基調とした彩釉タイルで覆われ、ステンドグラスをはめた多くの窓から差し込む光とあいまって、華麗な効果をつく

り出し、俗に「ブルー・モスク」と呼ばれる。

礼拝室の四隅と前庭の前面左右に合計 6 基のミナレットがそびえ、大小のドーム群とこれら尖塔とによって形づくる外観は他に例のない威容といえる。

17-3
ヌール・オスマニイェ・ジャーミ（**イスタンブール**，**1748～55**）
Nuru Osmaniye Cami（Istanbul）
スルタン・マフムード 1 世が1748年に着工し、オスマン 3 世によって1755年に完成されたモスクで、18世紀のいわゆるオスマン朝バロック様式の実例。
単一の大ドームで覆われた正方形プランの礼拝室と、柱廊をめぐらした馬蹄形プランの前庭とから成り立つ。一辺約26mの礼拝室は四隅のピアを結ぶアーチと、その上のペンデンティヴを介して大ドームを据えている。この構成はむしろ伝統的なものであるが、ドームの基部や四面の壁面に設けられた多くの窓により明るい室内をつくり出すとともに、随所に彫刻的な装飾を施し、新奇な雰囲気醸し出している点に特徴が見られる。一方、前庭をかこむ湾曲した柱廊はまったく先例を見ない。また、モスク全体が載る基壇は不整形で、甚だ変化に富んだ階段を伴う。

17-4
ルメリ・ヒサル（**イスタンブール**，**1452**）
Rumeli Hisar（Istanbul）
ボスボラス海峡に臨むおよそ250m×125mを占めるこの城郭は、コンスタンチノーブル征服直前の1452年 8 月、メフメット 2 世の命により着工し、 4 か月半という驚異的な早さで完成された。
厚さ約7mの外壁の間にそびえ立つ巨大な三つの塔がひときわ目をひく。その一つ、ハリル・パシャと呼ばれる十二面体の塔は、その径約23m、高さ約35mで、海峡に突き出すように立つ。他の二つの塔はともに円筒で、背後の丘の上に立つ。すなわち、右手に直径約24m、高さ約28mのサルジャ・パシャの塔、一方、左手には直径約27m、高さ約21mのザグノス・パシャの塔がそびえる。それらの間には、多角形と円筒それぞれ六つずつの小塔を備えている。
数あるオスマン朝時代の軍事防備施設の中でもとりわけ壮大で、かつ発展した形態を見ることができる。

17-5,7
ビュユック・イエニ・ハーン（**イスタンブール**，**1764**）
Buyük Yeni Han（Istanbul）
18世紀中頃、スルタン・ムスタファ 3 世の寄進によって各地に建設された多くのハーン（隊商宿、キャラバンサライ）のうち、首都イスタンブールに建つ典型的な実例で規模も大きく、当時、商取引のセンターとして機能していた。
中庭は、現在二分割されているが、当初は長さ約85mを超える長大なものであった（幅15～12.5m）。建物は 3 層で、中庭に沿ってアーケード・ギャラリーをめぐらし、その背後に150余りの小部屋を配する。街路に面する側では、持送りにによって上階を街路側に突出させ、長方形の部屋を作り出している。
切石と煉瓦を交互に層状に重ねる手法をはじめ、持送りや鋸歯状モールディングなどビザンティン以来の技法が見られる。

17-6
アフメット 3 世の泉亭（**イスタンブール**，**1728**）
Çesme（Fountain） of Ahmet III（Istanbul）
セルジュク朝時代以来、チェシュメあるいはサビールと呼ばれる公共に飲料水を提供する施設が、モスクやメドレッセなどに付属して造られたが、オスマン朝の時代になると、独立した泉亭の形態のものも

数多く見られるようになった。

この種の泉亭のなかで最も立派なものの一つが、アフメット 3 世によって1728年、ハギア・ソフィアとトプカプ・サライ〔→18-1〕とに面した広場に建設された。内部中央に貯水槽を備えた正方形平面の建物の四辺それぞれには、アーチに縁取られ、その両脇にニッチを伴ったチェシュメが配され、また建物四隅には、 4 本の小円柱によって三分割され、金属格子のはめ込まれた半円形のサビールが配されている。屋根中央部および四隅のサビールに対応した部分の 5 か所に、八角形ドラム上にドームの載る小塔が立つ。大きく張り出した軒は、四隅で特異な曲線を描き、バロック的優美さを表現している。また、ヴェフビーの詩文が刻まれていることでも名高い。

17-8
ハセキ・ヒュッレンのハマーム（**イスタンブール**，**1556**）
Hamam of Haseki Hurrem（Istanbul）
建築家シニアンがスュレイマン大帝の王妃ハセキの命によって1556年ハギア・ソフィアの近くに建てた公衆浴場。
全長約75mの建物は、東西はほぼ対称に、一つの隔壁によって、男性と女性用とに区画されている。男性用入口は建物東側、広場に面して設けられている一方、女性用入口は反対側の目立ちにくい北西隅に階段として設けられている。それぞれの区画は、一つの高いドームを冠する広い正方形の冷浴室、 3 連ドームの細長い温浴室、ドームを冠する八角形の熱浴室とからなり、焚き口は建物南辺に配されている。最奥の熱浴室は相対する四辺にイワーンを設け、さらに残り四辺は狭い通路奥に、それぞれが三つの小イワーンをもつブライバシーを保てる部屋となっている。

18-1
トプカプ・サライ（**イスタンブール**，**15世紀中～18世紀末**）
Topkapi Saray（Istanbul）
コンスタンチノーブルの征服後、20年を経て大規模なサライ（スルタンの宮殿）の建築が、マルマラ海と金角湾との間の岬の先端の地を選んで着工された。以来、居住目的ばかりでなく、政庁、会議室、モスク、学校、図書館など多種にわたる建物が、18世紀末まで中断することなく建設された。
全体として宮殿は三つの中庭の周囲に配された施設群、ハレム、庭園から成り立つ。中庭周囲の建物配置に厳格な秩序はないが、それぞれ実用に応じて区分されている。第 1 中庭は行進、儀式用の平坦な広場で、宮殿本来の領域は中央門をくぐった第 2 中庭からである。第 2 中庭に面して三つのドーム天井とその前面廊から成るディヴァン（宰相）の執務室が中庭周囲の単調な回廊から際立っている。パービュッサーデット〔→18-4〕は第 3 中庭に通じ、その正面に謁見の間、その背後に離れて、図書館やモスクが建つ。第 2 中庭と第 3 中庭が接する北側部分がハレムで、ここは数百年にわたって種々多様な施設が合体してきた。宮殿の北側一帯は、海や市街全体が一望できるスルタンの私的庭園で、バグダード・キオスク〔→18-2，3〕などさまざまな園亭が建つ。

18-2,3
バグダード・キオスク（**イスタンブール**，**1638～39**）
Baghdad Kiosk（Istanbul）
スルタン・ムラード 4 世のバグダード征服を記念して、トプカプ・サライ〔→18-1〕内の庭園北端部の最も眺望に適した場所に、1638年から39年にかけて建設された。
プランは、南側の長方形突出部分を除き対称形で、直径約9mのドームを架す中央広間に四つのイワーンが開く。周囲には、22本の円柱を結ぶわずかな尖頭形アーチのコロネードがめぐり、軒の深い木造の庇